

世界の平均気温は長期的に上昇しており、特に日本は北半球の中緯度に位置しているため、地球温暖化による気温の上昇率が大きいと言われています*1。同時に海洋は熱を吸収することで、自身も温暖化しています。近年では、北海道近海でも、ブリなどの暖流系の魚が漁獲される話も珍しく無くなってきました。そこで、今回は前号と同様にマリネット北海道のデータベース検索ページ*2から、北海道水産物の漁獲統計を検索・集計し、1991年～2017年までの北海道におけるブリの漁獲傾向についてまとめました。

《ブリの全道および各振興局別漁獲量の推移》 1991年から2017年における北海道の漁獲統計によると、道内におけるブリの漁獲量は1991～1993年では200トン以下でしたが、1994年以降増減を繰り返しながら、2000年には3,924トンに増加しました。その後2003年にかけて減少した後、再び増減を繰り返しながら増加し、2011年以降は2013年の12,016トンをピークに7,000トン以上の漁獲量となっています(図1)。振興局別の漁獲量の推移をみると、道南の渡島の漁獲量が多く、全道の漁獲量の推移と良く一致しています。渡島では2010年から2011年にかけて急増し、2011～2017年にかけて4,000～8,000トン台の漁獲量となっています。次に多いのは日本海側の後志で、全道および渡島と同時期に増減を繰り返し、2013～2017年には1,000トン台の漁獲量となっています。その他、宗谷、日高、根室およびオホーツクでの漁獲がみられ、いずれも2011年以降、顕著に増加している傾向がみられます。

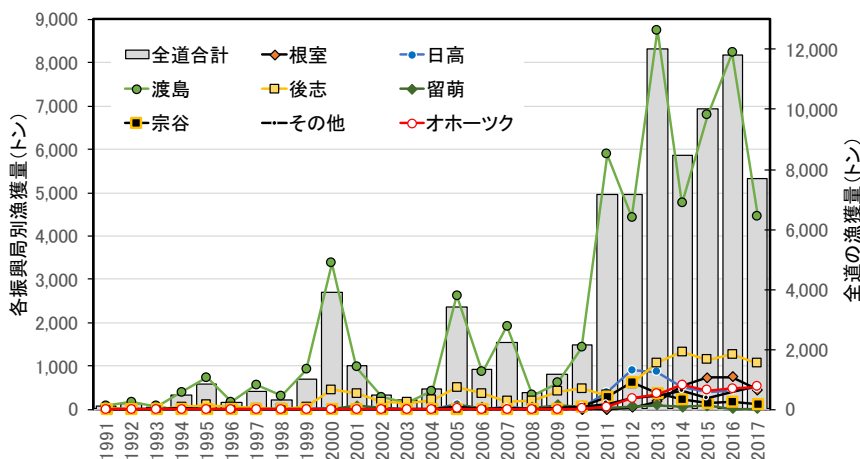


図1 全道のブリ漁獲量と振興局別漁獲量の推移

《振興局別漁獲割合の変化》 全道のブリ漁獲量の推移と振興局別漁獲割合を図2にまとめました。1990年代は渡島が70～90%と最も多くを占め、次いで後志が5～20%程度占めていましたが、2000年代では後志の占める割合が高くなり、10～50%を占めるようになると同時に、留萌でも10%弱の割合を示しています。全道の漁獲量が7,000トンを超えるようになった2011年以降になると、後志および留萌の割合が減少し、替わって日高(3～12%)、根室(1～8%)、宗谷(1～9%)、オホーツク(1～7%)の占める割合が高まっています。このように漁獲割合の変化をみると、2011年以降に道内では道南を始め太平洋沿岸を北上し道東方面へ、日本海側では道北からさらにはオホーツク海側へ漁獲される地域が広がっている様子がみえてきます。気象庁のホームページ(海面水温の長期変化傾向(日本近海))*3によると、日本海

北東部および釧路沖は長期的に海面水温が上昇しており、特に釧路沖の夏(7～9月)は2010年以降顕著に上昇しているようです。日本海北東部については同時期に顕著な海水温の上昇傾向はみられませんが、こちらは対馬暖流や宗谷暖流の強弱と照らし合わせると何かしら傾向がみえて来るかも知れません。

(網走水試 佐々木義隆)

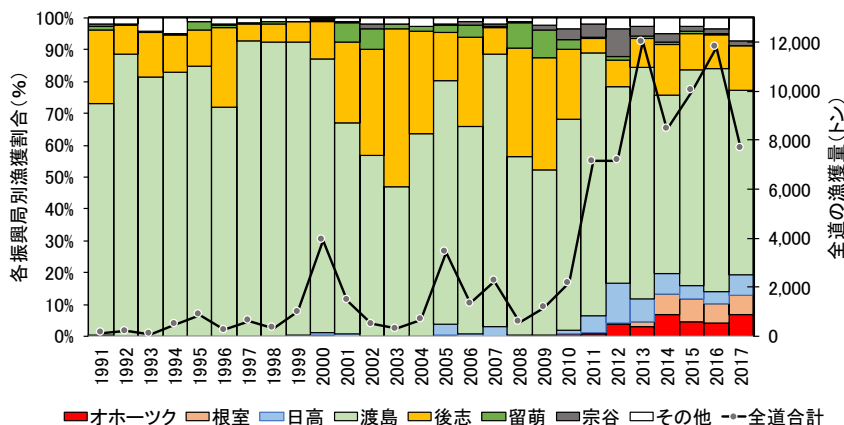


図2 全道のブリ漁獲量と振興局漁獲割合



*1 : 気象庁ホームページ https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/chishiki_ondanka/p08.html

*2 : <http://www.hro.or.jp/list/fisheries/marine/h3mfcd0000000ge0.html>

*3 : 気象庁ホームページ(海面水温の長期変化傾向(日本近海))

https://www.data.jma.go.jp/gmd/kaiyou/data/shindan/a_1/japan_warm/japan_warm.html